

## 書評

長谷川裕子

### 『中近世移行期における村の生存と土豪』

近藤 祐介

本書は、土豪層の活動を軸に中近世移行期（一五世紀後半から一七世紀まで）社会の特質の解明に取り組んできた著者が二〇〇八年に立教大学に提出された博士論文をもとに、まとめたものである。多くの既発表論文を持つ著者の研究が、こうして一書にまとめられたことの意義は非常に大きい。

本書の構成は以下のとおりである。（括弧内は初出年）

#### 序章（新稿）

第一部 土豪の融通と村の生存

第一章 居住形態にみる土豪と村（二〇〇五年）

第二章 土豪の土地所有と村（二〇〇一年）

第三章 土豪の融通と在地徳政構造（二〇〇三年）

第四章 売券・借用状にみる土豪の融通（二〇〇四年）

第五章 人身売買にみる土豪の融通（二〇〇四年）

#### 第二部 村の生存と中近世移行期社会

第六章 地域権力家中の形成とその背景（二〇〇一年）

第七章 土豪同名中の形成・構造とその機能（二〇〇二年）

第八章 土豪の生態と村・大名（二〇〇四年）

付論 深谷幸治著『戦国織豊期の在地支配と村落』  
によせて（二〇〇四年）

第九章 村の生存における土豪の機能（二〇〇五年）

補論一 中世・近世土地所有史の現在（二〇〇四年）

補論二 村・土豪・地域権力研究の軌跡（未発表）

序論では、先行研究の整理と研究視角について述べ、八〇年代以降の村論・飢饉論の進展により、これまでの生産様式論にもとづいた議論では捉えられない、中近世移行期社会の実態が浮き彫りになったとする。そして、こうした研究動向を踏まえて、「土豪を結節点として形成される中近世移行期社会の実像を、村の生存という視角から追究すること」を課題とするという。

ここで言う「村の生存」とは、慢性的飢饉状況にあった中近世移行期社会にあって、人々が村という生命維持組織に結集し、創り出された（主として再生産維持・生命維持のための）諸関係を基軸に、歴史的段階やその社会システ

ムを把握するための視角であるという。

また、土豪とは、これまで「中間層」として分析されてきた階層を指すが、村との関係からこうした人々の活動を捉え直し、「村と直接関係を持ち、村の生存を支える活動を行っていた人々を総称して「土豪」と定義」したと述べる。

それでは以下、各章ごとに内容を紹介するとともに、適宜コメントを加えていく。そして最後に、本書の全体を通じて浮かび上がってくる成果と課題について評者の考えを述べてみたい。

## 一 土豪の融通と村の生存

第一部は、土豪が行っていた経済的活動と、それが村の生存という問題といかに関わっていたのかを考察した五編の論文から成る。

第一章は、駿河国獅子浜村の土豪植松氏を事例に分析を行っている。獅子浜村の地域景観の復元を行った上で、戦国期の植松家について葛山氏・北条氏のもとで口野五カ村支配の末端を担う一方で、居住村である獅子浜村では名主として漁業にも従事していたことを指摘し、江戸時代には植松・増田両家が名主家として、両家の分家が津元や村役人となり獅子浜村を主導していたと述べる。また、獅子浜

村屋敷割図の分析から、植松氏が浜までの道や土地・山を一体として所有・維持し、網組の人々を敷地内に抱えて生業である漁業を行ったことを論じ、土豪が村に根を下ろした存在であること、こうした土豪を中心に村が形成された可能性を指摘する。村の成立過程における土豪の主導性を指摘している点は、戦国期の開発の事例などともかわり興味深い。だが、使用されている史料の多くは一八・一九世紀のものであり、なお検討の余地があるように思われる。

第二章では、近江国坂田郡箕浦村の井戸村氏を事例に、中近世移行期における土豪の土地所有を考察する。まず、江戸時代における井戸村氏の土地所有の実態を分析し、井戸村氏の所持する土地は、買得した「まとはかし申」地（年季売による「能米」収取）と先祖伝来の「預ヶ置」地（毎年「上米」収取）に分けられ、後者の土地を耕作する者を「被官人」と定義したうえで、経済的に不安定な「被官」と井戸村氏の従属・保護の関係を評果する。そして、寛永期における井戸村氏と「被官」の土地所有をめぐる訴訟をとりあげ、「被官」が検地の名請を根拠とするのに対して、井戸村氏は天正一九年作成の「作職書上」を根拠としていることから、井戸村氏の土地所有の淵源が「作職書上」にあり、その実態は戦国期から基本的に変化していないことを指摘する。そのうえで「作職書上」の分析から、井戸村氏の土

地所有の実態を作得分と作人の耕作権からなる作職を所持し、耕作部分については土地に付属している耕作者に預け、彼らを被官として従属させる、というものであったことを指摘する。そして、井戸村氏の土地所有と太閤検地の関係について触れ、太閤検地における名請人が土地所有者ではなく、年貢納入責任者であったこと、寛永期以降の被官の自立化運動の中で、自己の土地所有を正当化する論理として「太閤検地の名請」がクロージアップされたことを指摘し、寛永期に現れる被官の自立化傾向は、戦争状況の解消による再生産の安定化、それに伴う土豪の役割の縮小化によつて起こつたとする。この論文は続く第三・四・五章の土台となる論文と言える。安良城盛昭説以降活発に論じられてきた中近世移行期における土地所有研究を正面から受けとめ、太閤検地前後の土地所有構造が基本的に変化していないことを明らかにした研究であり高く評価できる。

第三章では、中近世移行期土地所有をめぐる問題を、「村の成り立ち維持」（村の生存）という視角から考察するとし、①村による土地の共同所持、②「加地子得分・作得」、③徳政、という三つの論点を提示する。①では「村の当知行」論を踏まえ、入会地のみならず、耕地も村によつて確保されていたことを論じる。②では、加地子が年貢の一部であり、戦国期になると地域権力によつて給分として保証され

るようになるとする。一方、作得（「作職足」）は、土豪が百姓の年貢未進の弁済という経済的扶助の結果として獲得したものであるとし、土豪の土地集積志向を否定する。そして、こうした土豪の活動は、百姓や村の再生産維持に必要な不可欠な融通であり、そうであるがゆえに、作得分收取は村によつて保障され続けたと説明する。③では、徳政一揆を特殊な状況下で暴徒化した一揆行動であり、本来的な在地徳政と区別すべきであるとし、その上で本来的な在地徳政とは年貢・得分の請負関係を維持しつつ、不作時の免除を求めたものであったと指摘する。作得分が村によつて保証された理由を土豪の融通機能と関連させて説く点は、なぜ土豪は収取が可能であったのか、という問いに答える新しい解釈である。

第四章では、「村の成り立ち」（村の生存）という視角から、土豪の土地所有の問題を、売券・借用状の分析から追究する。まず先行研究を整理する中で、当該期の社会が戦争・飢饉による不安定な生産状況であり、人々は「村の生存」に依り土豪の活動もこれに規定されていたとし、土豪の土地集積という見方の転換、土地を売却する側の状況を考察する必要性を述べる。そして、百姓の土地売却は年貢未進を契機とした土豪による経済的融通の結果であると、土豪の融通が村の生存を補完する役割（年貢未進補

填システム)を果たしたことを指摘する。土豪は米の融通、銀子の換金や借用などの経済的機能を担うが故に、その特権的地位が村や地域の中で認知され続けたとする。土豪の土地集積を経済的融通の結果と位置づけ、その実態を経済的扶助であったとする理解はこれまでの中間層論を見直す重要な指摘である。今後は土地売却後の土豪と百姓の間に結ばれた被官関係の具体的検討が課題となるだろう。

第五章では、中近世移行期における土豪の人身売買の問題を、人々の生命維持や村の生存という視角から追究する。ここでは、飢饉などを契機とした人身売買を、飢民の生命維持のための方策であり、土豪が飢民を「下人」として扶助する役割を担ったとする。また、土豪の家産に組み込まれず村成員のまま、年貢弁済などによる売買・貸借関係から土豪と従属関係を結ぶ事例を挙げ、これを被官契約とする。そして、土豪のもとには家産としての「下人」衆と、被官契約を結ぶ「被官」衆という二つの従属関係からなる人間集団が組織されていたことを指摘すると共に、こうした従属関係が生命維持・経営維持のための対処法として生じたものであると述べる。さらに土豪が被官関係を維持し続けた理由として、「土豪が村内・地域内における有徳身分として存在し続けるために必要とした要件であった」と説明する。しかし、土豪と被官の関係を考察する際に使用

した史料は一八世紀末の事例であり、課題が残る。被官関係においては「上米」回収以上に、「御奉公」による被官関係維持の方が重要であった」と説明するが、そうであるならば、この「御奉公」について当該期の具体的なあり方を示す必要があったのではないだろうか。

## 二 村の生存と中近世移行期社会

第二部は村の生存という視角から土豪と上級権力との関係について考察した四編の論文と付論および二編の補論からなる。

第六章では、戦国期における地域権力の形成過程(家中成立)を村の視点から追究する。事例としては近江国坂田郡箕浦の国衆今井氏を取り上げ、家中の分裂が境目地域において現出したこと、家中相論(土豪同士の相論)の根底には、再生産をめぐる村々同士の用水相論があったことを指摘する。そして、こうした村落間相論に直接対処を迫られた土豪層が、その問題解決のためにより強力な領主権力に結集することで家中が成立したと述べ、家中成立の要因を、村請や村落間相論の激化とこうした対立が土豪間の対立へと発展していく社会状況に求める。また、こうして成立した家中は常に対立をはらんだものであり、地域権力の

不安定化によって分裂する可能性を持つており、国衆や土豪が村を支配することができたのは自己の在所に居住して家中を統制し、領外の敵対勢力を排除できている場合に限られたと結論付ける。家中の成立過程に村落の動向を具体的に組み込んだ点は重要な指摘である。だが、本章は先行研究（具体的に名が挙がっているのは峰岸純夫氏・松浦義則氏・池享氏）に対する批判としては十分とは言いがたい。それは、筆者が家権力の変質を「領主による百姓支配」ではなく「領主による村支配」から追究するとし、その具体的な動向を領主の村落間紛争への介入ということに収斂させてしまったからではないだろうか。

第七章では、戦国大名・国衆とは異なる地域権力である惣国一揆に注目し、その基礎単位となる「同名中」の構造と成立過程を近江国甲賀郡を事例に考察する。同名中組織が非血縁諸氏を含む擬制的一族結合であり領を形成していたことを指摘する。同名中組織とは村落間相論の激化と中央権力の分裂を契機に、同名同士が紛争調停のために結集した組織であり、第六章で検討した家中の成立要因と同様であると述べる。そして、永祿一三年（一五七〇）の「大原同名中与掟」の分析から、同名中が村落間紛争の調停や村の再生産に対する保護・保証を行う組織であり、そうであるが故に領内百姓を軍事動員することができたと指摘す

る。戦国大名・国衆と惣国一揆を戦国期の地域権力の二つの形態と評価する点は概ね首肯できる。今後は著者も指摘するように惣国一揆の解体過程の追究が課題となるだろう。

第八章では、東国の後北条領国を題材に、土豪と村・戦国大名との関係を追究する。ここでは、土豪が漁業や農業などのほか商業や金融業など多様な生業を営み、村や地域を超える経済圏とネットワークを形成していたことを指摘し、こうしたネットワークと経済力を背景に村の生存を支える融通が行われていたとする。また、蔵銭・郷藏の管理・運用や物資調達、開発や軍事動員の事例から、大名領国における土豪層の果たした役割の重要性を指摘する。さらに、土豪層の被官化を自村の権益維持・拡大のための活動と述べる。史料の少ない東国を題材に土豪の広域的活動やネットワークを考察しており、多くの論点を含む内容である。しかし、そのことが逆に論旨を分散化させてしまっている印象を与えるのは残念である。

第九章では伊豆国長浜村という漁村を事例に、江戸時代前期に村の生存という社会システムがどのように機能していたのかを追究する。まず、長浜村における諸役とその負担のあり方を概略した上で、津本は大資本による立網漁、網子は網漁や釣漁などで経営を維持していたとし、漁法をめぐって両者は対立傾向にあったが不漁・飢饉といった

社会状況により網子は津本を頼らざるを得なかったと述べる。津本は不漁・飢饉時には網子に対して、金銭・人身養育などの融通を行ったり、公儀の拝借金を申請する役割を担ったこと、こうした役割が村内身分の維持へつながっていたことを指摘する。

補論一・二では土地所有史と土豪・村・地域権力をめぐる研究史が整理されており、筆者の問題関心が抽出されている。ここでは特に、階級闘争史観を生産発展論に対して民衆の主体的動向を捉えようとしたものと評価しつつも、階級対立を当該期社会の主要な課題として設定したことに問題があった、とする点に注目したい。階級矛盾というタテの関係ではなく、村落間紛争というヨコの対立関係を重視する視角は本書を一貫するものだからである。

### 三 本書を通して

本書の成果としてまず挙げられるべきことは、これまで手薄であった土豪の経済的活動に注目し、その実態を史料に即して丹念に明らかにしたという点である。特にこれまで土豪による土地集積、領主化と把握されていた動向を経済的融通・扶助の結果と捉え直し、村との関係から位置付けた点はこれまでの「中間層論」を相対化する重要な論点である。

また、戦国期における国衆家中・同名中といった地域権力の成立を村落間紛争の激化とそれによる土豪同士の間立という在地状況から説き明かした点も大きな成果である。上述したように先行研究との切り結びは課題ではあるが、村同士の在地紛争の解決が土豪層の抱えていた課題であったことは間違いない。

さらに土豪層の広域的なネットワークと多角的な生業のあり方を浮き彫りした点も注目される。これまで「村の侍」や「有徳人」、「商人」などとして分析されてきたものを土豪の持つ多様な「顔」の一つと捉え、分析する必要性を示したことは重要な指摘である。この点については長谷川裕子氏「戦国期在地領主論の成果と課題」(『歴史評論』六七四号、二〇〇六年)も参照いただきたい。

以上の成果を踏まえたいうで、評者が感じた疑問点や課題について若干述べていきたい。

まず第一に、第一部で扱った土豪の土地所有の問題と第二部で展開された土豪と地域権力との問題が相互にいかなる関連を持つのかやや不鮮明な印象を抱いた。第六章三節では土豪の土地所有の不安定性が強調されているように思うが、これは結果的に第二・三章で展開してきた論旨を矮小化させてしまっていないだろうか。土豪の土地所有が日常的な在村状況に支えられていたこと自体には異論はな

いが、主人（土豪）の籠城状況が即座に被官の離反・家中の分裂を引き起こすという理解にはやや疑問が残る。なお、ここでの史料解釈については牧原成征氏の批判もある。

第二は土豪の経営破綻に関する部分である。土豪の経営をめぐって本書の中ではたびたび百姓に対する融通の結果として土豪自身の経営が破綻していく事例が紹介されている。そして、著者はこれを土豪の経営能力の問題として処理しているように思われる。しかし、村の生存を支える土豪の融通という本書の趣旨からすれば、こうした土豪の経営破綻は村の生存という社会システムの危機として論じる必要があったのではないだろうか。

最後に序論で課題として挙げた点について振り返ってみると、村の生存という視角から土豪を結節点として形成された中近世移行期社会の実像はかなり具体化された（特に経済的関係について）と言え、課題には十分に応えたものであった。しかし一方で、村の生存という視角からの追究であったため、そこで描かれる土豪像がやや平板なものとなってしまう印象がある。すなわち、村という生命維持組織を支えるものとして、これを支えるために（時には身を削ってでも）ありとあらゆる経済的融通を行う存在、という土豪像である。確かに土豪がこうした一面を備えていたことは本書が明らかにしてきた貴重な成果である。しか

し、こうした像も土豪の持つ一つの「顔」であるとするならば、今後は土豪の諸活動について異なる角度からも追究する必要があるのではないだろうか。

以上、評者の関心に則して内容の紹介とコメントを加えてきた。力量不足のため中近世移行期を扱った本書に対して戦国期を中心に批評を加えることとなってしまった。近世史の立場から見た著者の研究については渡辺尚志氏の研究<sup>2</sup>などを参照いただければ幸いである。また、評者の浅学のため著者の真意を十分にくみこんでいない誤読や的外れな指摘があるかと思う。ご寛恕いただければ幸いである。

（校倉書房、二〇〇九年三月刊、三九六頁、一〇、〇〇〇円（税別））

## 注

（1）牧原成征『近世の土地制度と在地社会』（東京大学出版会、二〇〇四年）

（2）渡辺尚志『近世の村落と地域社会』（塙書房、二〇〇七年）

〔付記〕 本稿は平成二一年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程）